

GHQの戦後医療改革 と原爆被災調査

—原爆投下1ヶ月、広島に生命もえいづ—

津山 直一

聞き手：佐多保彦 株式会社東機質 代表取締役社長

佐多：先生が終戦を迎えられたのはどちらでしたか。

津山：昭和20年8月15日、私は東京大学医学部の3年生でした。これから天皇陛下の放送があるから安田講堂に集まれ、といわれたのです。私は、恐らく沖縄は落ちる、敵は本土に上陸して来る、徹底的な戦いが始まるからそのつもりでいろ、というようなことに違いないと思っていました。音の悪いラジオから、「忍びがたきを忍び、耐えがたきを耐え……」、やがて最後に「ポツダム宣言を受諾する」と。それから学生たちの間にざわめきが起きました。「結局、負けたということじゃないか」「戦争はこれで終わりということか」。泣き出すヤツがいる、そんな馬鹿なと怒り出すヤツもいる、これで良かったんだというヤツ、その良かったというヤツを張り飛ばすヤツもいる……。その夜の下宿の雰囲気というものは、全くすごいものでした。

その玉音放送の直後には、厚木などで軍人の反乱が起きたりしました。しかし、燈下管制で真っ暗だった大学の夜に電灯がつき、秋が来始めるところ、私はああ死なずにすんだな、生きていけるんだなという、何ともいえない喜びを感じました。嬉しくないといったら嘘になる。

佐多：それまでは、やはり死を覚悟されていたのですか。

津山：それはもちろんです。9月には召集される予定でしたからね。しかし、終戦で日本は一挙に変わりました。GHQの占領政策のもとで、実に無節操に変わりました。民主主義を教えてくれたのも、婦人参政権を与えてくれたのも彼らです。

医学医療の分野にも、大ナタが振るわれました。まずは医学教育のレベルアップです。医師の促成栽培のために戦時中作られた急ごしらえの医学校が取りつぶされ、医学教育を6年間としました。そのうえで、オールラウンドのインターンを1年間、さらに国家試験をやれ、というわけです。それまでは、4年間の卒業証書イコール医師免許だったんです。ですから、我々は第一次のインターン経験者であり、初回の国家試験の合格者ですよ。

戦前の医学教育はドイツ式でした。ドイツ人教師からドイツ語で、ついでドイツ帰りの日本人教授から、"てにをは"だけ日本語の講義をうけました。「このクランケは、ブレッツデッヒにザイテンパウホにシュメルツをクラゲンし、ディアグノーゼはアッペンディツティ



津山 直一 / つやま・なおいち

1924年、兵庫県生まれ。48年、東京大学医学部卒業。東京医科歯科大学助教授、東京大学医学部整形外科教授をへて、現在国立身体障害者リハビリテーションセンター名誉総長。

スアークタであった」という具合でした(笑)。いまはこれが英語になっていますが。そうかと思うと、軍人あがりの国粋主義者は「全部日本語でないといかん」といっていましたよ。自動車のハンドルを転把^{てんば}というように。とくに外科系の教授は尊大このうえなくて、弟子を怒鳴りつけたり、メスを投げつけるような独裁者でした。

それから私が一番感謝しているのは看護婦さんの三交替制です。「看護婦は24時間患者から目を離しちゃいかんのだ」というんですね。それまでは家族が患者に付き添っていて、例えば、夜中に「すみません、主人が痛がっています」と看護婦さんを起こしていたのです。もうひとつは麻酔科の独立です。従来、外科手術の時には麻酔当番が、教授に「血液が黒くなったぞー」「酸素を増やせー」と怒鳴られながら、麻酔管理していました。それを見ていた米国の医者が「手術をする時には、全身状態や心肺機能、麻酔の深さなどを第三者に管理させて、自分は納得のいく手術をやれ」「それも教授の独断ではなしに、助手と相談しながら、穏やかな雰囲気やれ」と指導しました。

このほか、終戦から戦後にかけて私は実に様々な経験をしました。しかし以上のような制度的改革の前に、広島と長崎の爆心地の調査があったのです。

佐多：その調査の時、先生はまだ医学生でおられたのですか。

津山：そうです。彼ら(GHQの調査団)は早く広島と長崎に行かなくちゃならなかった。今のうちに被害のなまなましいデータを集めて、原爆というものの実態をつかみたかったのです。それで、雑兵として、希望する学生を集めていました。我々は、このまま食料もないようなところにいるよりは、アメリカ式の医学を多少でも学べる機会と思い、それに応募したのです。9月に第一陣が行き、我々は第二陣でしたよ。長崎には九州大学の連中が行ったと聞きました。

佐多：先生は当時、原爆ということをご承知だったんですか。

津山：知りませんでした。なにしろ、ピカッと光ってドーンとあって、街中がつぶれたので、みんなピカドンと呼んでいたんです。が、物



図1:ピカ……ドン……市内から郊外へ、
ものすごいきおいで、一ばん先に走ったの
は牛たちでした



図2:爆心地の話をつたえてくれる人は、いません
(丸木位里、赤松俊子『ピカドン』1950.8.6.
ボツダム書店発行より)

理の学生たちは原子力だといいましたよ。飛行機一機で来て、爆弾一発で街全体が破壊されるなんて、原爆に違いない、と。

調査団は50～60人で編成され、汽車で広島県の宇品町^{うじな}に行きました。その時まず驚いたのは、米軍の物資の豊富さです。薬品、ジーブ、レーション(割当配給食料)……。つぎに感心したのが、衛生兵のレベルの高さです。血液の検査なんか、日本では医者がやっていました。それをオートマチックのアナライザーでやるんです。そういったことがたたきこまれているんですね。その彼我の差に愕然としましたよ。これじゃ、戦争に勝てないな、と。

佐多：調査はどのようなものでしたか。

津山：米軍の軍医将校がリーダーでした。彼は血液の専門家で、ニューヨークの街の開業医でした。そういう医者を取りたてて高位高官を与えて派遣していたのです。

まず爆心地から500メートル、1000メートルと同心円を描いて、生存者をシラミつぶしに調べて回りました。防空壕の中、全身火傷だらけで、放射能のために、髪の毛が全部抜けた女。焼けただれた皮膚に、粉みじんに割れたガラスがめりこんでいたり、ただれたところに蛆虫^{うじ}がわいていたり、実に見られたものではありませんでした。だいいち、広島駅の降り立って、ズーッと広島を見渡したとき、まったく何も無いじゃありませんか。全部こわれている。向こうの山肌まで焼けている。一発の爆弾であそこまでつぶせるとすると、本当に怖いものだと思います。その当時、放射能の影響で、広島に100年は生物が育たないとも言われました。でも、それはデマだったんですね。私が足を踏み入れたのは、投下から一ヶ月半後ですが、わずかに雑草が生えかけていましたから。放射能は指数関数的になくなるのですね。

しかし、その破壊の程度は、ミゼラブル(悲惨)の一語です。破壊力と熱と放射能の三つによるものです。車を引いて橋を渡る人物の姿がくっきりと灼きついて残っていましたよ。橋の上に影が、写真のようにね。

半径500メートル以内には、一人も生き残っていませんでした。1000メートルで一人か二人、大きなビルの地下室などにいて助かった人がいたようです。1500メートルになるともう少し多くなり、2000メートルではかなりの人数になりました。朝ドカーンと来て、



一瞬に丸焼けになって、何のことも分からずに、焼けただれたまま、郊外に逃げて行ったのです。その行き先まで、我々はジープに乗って追いかけて行って、血液の検査をしましたよ。

それから男は精液の検査、女は子宮内膜の検査をしました。こんなこと、よくできたと思うでしょう。米軍の食料と交換で、検査させてくれと頼んだのです。今でもよく覚えています。試験管を渡して「これにあなたのザーメンを採ってきてくれ」と。しかし「なんぼやっても立ちまへん」というわけです。するとアメリカの将校がすさまじいボルノを出してきて、「これを見ながらもう一回やってみろ」と。そうしたら「あ、出ました」と(苦笑)。その精子の数をカウントするんです。そうやってデータをそろえたものですよ。

血液のほうはリバウンド現象で、白血球の数が増えていたようでした。それが精液^{せいじ}のほうは、無精子状態^{みしじ}というのか、精子がまったく動かない、壊死状態^{くわし}でした。放射能の影響は、造血器官より生殖器官のほうが大きいと感じたものです。

佐多：データはどうなったのでしょうか。

津山：日本との共同研究として、データは全部公表すると約束していたのですが、結局、渡してくれなかったですね。持ち逃げですね、悪くいえば。もっとも、いまは公開文書になっていることでしょうか。

佐多：広島では14万人の非戦闘員が亡くなられたと聞いています。

津山：そうですか。当時あれほど悲惨な大被害をもたらした原爆も、いまでは大学の実験室でも作れるようなものだそうですね。本当に怖いものです。

佐多：私が親しくしていただいている藤女子大学人間生活学部助教授の伊藤春樹先生のご発案から、イタリアのアッシジ及びペルージア両市(*)で同時開催されることになった広島・長崎原爆展(**)実現のお手伝いをしております。このこととの関連から、今日の先生のお話は大変貴重な証言のひとつとして、長く記憶しておきたいものと思います。

*アッシジは聖フランチェスコ大聖堂で有名なイタリア中部の町。

ペルージアはアッシジから車で30分ほどの歴史都市で、ウンブリア州の州都。

**広島市の予算によりイタリアではじめて、1997年3月から1ヶ月間開催される。